

<16>

「お母ちゃん達」による農村レストランの取組（新潟県長岡市） ～農村レストラン多菜田～

1 調査対象と取組の概要

ヒアリング先	農村レストラン多菜田（新潟県長岡市）
取組のポイント	<ul style="list-style-type: none">▶ 平成 16 年の新潟県中越地震で多くの支援を受けた恩返しとして、自分たちが今持っているものでおもてなしをという考えから、山の「お母ちゃん達」が大切にしているもの、すなわちこの土地でとれる野菜や山菜を生かした郷土料理を提供する農村レストランを開こうと考えた。▶ 県、市、地元地区の区長など多くの後押しと応援を受けて、平成 20 年 12 月、県の復興基金を活用して農村レストラン「多菜田」を開店した。その後、順調な経営を続けており、「お母ちゃん達」が郷土の野菜、山菜、おいしい水などを生かしておいしい郷土料理を提供している。▶ 平成 23 年に発生した東日本大震災では被災地へ入り、炊き出し等の支援を行った。自らの被災経験を生かし、物資の不足や衛生環境、被災者の状況に配慮した緊急支援を実施した。
ヒアリング日時	平成 25 年 1 月 9 日

2 活動・事業のきっかけと準備

避難生活から村に戻ってきて仲間と再会～恩返しの気持ちから活動を発案

- ✓ 農村レストラン代表の五十嵐氏は、新潟県中越地震の後、避難所及び仮設住宅における生活を経て、震災の 2 年後に当たる平成 18 年 11 月に旧山古志村に戻ってきた。
- ✓ 同じ集落（地元）の友人 4 名で話し合う中で、新潟県中越地震の際に全国から支援が集まったことに大変感激したことを踏まえ、何か恩返しができないかという話になった。そして、復旧・復興の過程で様々な人が旧山古志村を訪れる状況をみて、応援してくれる方々へ、自分たちができることで恩返しをしようという考えに至った。
- ✓ まずは自分たちが今持っているものでおもてなしをという考えから、山の「お母ちゃん達」が大切にしているもの、すなわちこの土地でとれる野菜や山菜を生かした郷土料理を作って人々をもてなしたい、そのために農村レストランを開こうと考えた。その背景には、以前からこの土地の郷土料理は自然の恵みを豊かに楽しめるとても贅沢なものだという思いがあり、また五十嵐氏が以前学校給食の栄養士をしていたことも関係していた。
- ✓ また、震災前に、旧山古志村の闘牛場のイベント開催時に、現在、農村レストランに

関わっている五十嵐氏をはじめとした「お母ちゃん達」数名で郷土の野菜等を使っておにぎりやきのこ汁などを作ってふるまい、その料理を喜んでもらい、人々と交流できた機会が大変嬉しかったという経験がある。このような経験も、農村レストランの発想につながっていた。

メンバーの一人のアイデアから復興基金の活用に至る

- ✓ 最初のうちは何から、どのように手をつけてよいか、資金面の工面についても見当がつかなかったが、メンバーの一人から、農村レストランを開くのであれば、県の復興基金を活用した支援事業に該当するのではないかというアイデアが出た。
- ✓ そこで、県の地域振興局に相談に行ったところ、「母ちゃん達のそんなアイデアを待っていた、ぜひ申請して、応援するからがんばって」と快く受け止め励まされた。
- ✓ 実は、県の復興基金を活用した地域特産化・交流支援事業（復興事業）への申請としてはこれが第一号であった。付帯設備・備品等は助成対象外として、結果的に1,500万円弱（建設事業費の約4分の3）の助成を受けることとなった。

レストラン多菜田



大きかった地区の区長の後ろ盾、地域復興支援員などによる支援

- ✓ 農村レストランを始めることを検討している際に、旧山古志村の虫亀地区で、地域活性化を目指した虫亀コミュニティ会議という住民のグループ会合（検討委員会）が立ち上がっており、そこでも様々な意見が交わされていた。このコミュニティ会議は地元住民約30名で構成され、約3分の1は女性だった。五十嵐氏もこの会合に参加していたが、その中で「ちょっと食事ができて休めるような場所をつくれるとよい」など、農村レストランと同様の発想の意見もあった。
- ✓ そこで、メンバーは、実は既に農村レストランの企画を持っていることを地区の区長に話しに行った。区長は「金銭的な援助はできないけれども、色々な援助はできる」と取組を支持し、様々な復興関係のイベント等にメンバーを連れて行き、行政や関係者に紹介してネットワークを作ったり、休耕地となっていた畑をレストランで使う野菜作りのために斡旋したりと、様々なバックアップをしてくれた。この支えも大きかった。
- ✓ また、旧山古志村には県の復興基金を活用した事業である地域復興支援員が5人いる。

この地域復興支援員は、復興を地域で人的に支える役割を持ち、新潟県中越地震後に仮設住宅でボランティアを行った人たちが就いていた。これらの地域復興支援員も、農村レストランの開設に至る過程で相談に乗るなど手伝ってくれた。

3 活動・事業の内容

農村レストラン「多菜田」のオープン

- ✓ 平成 20 年 8 月、様々な苦労があった申請手続きを経て復興基金の助成が決定し、早速建物の設計・建築、各種設備等の準備に入った。復興基金からの助成は 4 分の 3 であったため、什器等の備品や開設当初の材料費などの費用は、創業メンバーで 100 万円ずつ出資金を持ち寄るなどして対応した。レストランの敷地は、メンバーの 1 人が所有していた土地を活用した。
- ✓ 区長や市、県などから多くのサポートを得て、平成 20 年 12 月ようやく農村レストランが開店した。

多菜田定食



農村レストランの運営

- ✓ 農村レストランは、創業メンバーを中心に、週休 2 日制で運営を開始した。最初の半年間は、メンバーは無給で働き、ある程度資金をためて運営を継続していくことができるようにした。復興基金の助成が出ていて 5 年間の報告義務があることから、5 年間は店を潰してはならないと無我夢中でやってきた。現在は、初期費用の一部として出した出資金も各メンバーに対して完済し、メンバー全員の賃金も払えるようになり、経営は順調である。
- ✓ 繁忙期にはパート等も雇い、多い時は 7~8 人のスタッフがお店で働いている。「多菜田」とデザインした文字が入り、「お母ちゃん達」のイラストが入ったグリーンのエプロンを身に付けてがんばっている。冬はお客さんが少ないが、山の大変な生活の中で休める場所を提供したいという思いで、冬でも店を閉めることなく営業している。
- ✓ メンバーの家族は、お母ちゃんが元気なことが家庭に良い影響があるという考えで、どの家庭もとても協力的である。

立ち働く「お母ちゃん達」



被災経験を生かした東日本大震災被災地への支援

- ✓ 東日本大震災では、旧山古志村の地域では、自分達の被災経験を生かすとともに、その時に受けた支援の恩返しも含めて、被災地の支援をしようという気運が高まった。
- ✓ 旧山古志村の地域復興支援員を中心として被災地支援に向かうグループが結成され、五十嵐氏をはじめ「多菜田」のメンバーも加わった。支援グループの先発隊2人がまず現地に入り、支援を受け入れてくれる自治体を探した。結果的に南三陸町の支援に行くことになり、発災後9日目に当たる平成24年3月20日に、3台の車（灯油を積むタンク車、資材運搬車、支援スタッフを乗せる車）を連ねて日帰りで現地に向かった。五十嵐氏らは、600人分の豚汁と焼肉ができる用意をして現地に向かった。道路事情も非常に悪く、片道8時間かかる道中だった。
- ✓ 支援に行く際には、自ら被災経験があったことが様々な配慮につながった。被災地では燃料が不足していることが想定される。灯油をできるだけ多く持っていくため、地元ガソリンスタンドがボランティアでタンク車の提供と運転の協力を行った。また、被災した際に食べたかったものは何かという発想で食事のメニューを考えた。トイレ事情や衛生面が問題となることから、現地に迷惑をかけないことを一番に考え、ゴミなどは全て持って帰る、車両のガソリンは持参する、逆に現地で必要とされるもの（例えば水や味噌など）は全て置いてくるなどの点に配慮した。
- ✓ その後も被災地への支援と交流の活動は続き、現在は陸前高田市との交流もある。陸前高田市で、趣味でエプロンを製作している女性グループと知り合ったが、今度そのグループに「多菜田」の新しいエプロンの製作を依頼しようかとも考えている。

4 活動・事業の成果と課題

様々な人々との暖かいふれあいから得られるもの

- ✓ 旧山古志村には、避難所及び仮設住宅における生活を経て、子育て中の若い世代も戻ってきた。そうした世代から、地元の「お母ちゃん達」が頑張っている姿を見てもらえることがうれしい。地元の人からも「お母ちゃん達が頑張っているからうれしいよ」という声も聞かれる。最近は地区の人も、行事などでお弁当を注文し

たり、お客さん用にお弁当やオードブルを頼むなど、地区の人にも親しんでもらえるようになってきた。

- ✓ 地域外から来る人にも、この地域の食の贅沢を楽しんでもらい、認めてもらえることが大変嬉しいことである。中には東日本大震災の被害を受けた東北から訪れる人もおり、山古志の復興に向けて頑張っている姿を見て「私たちも頑張ろうと思います」と言ってくれることがあり、そのような時に意義を感じることもある。

地元への還元

- ✓ 材料を調達する際には、まず地域の虫亀地区で調達する。地区になれば旧山古志村の地域で探し、どうしてもなければ地域外に調達に行くという方針である。これには自分達が得た収益は地元に戻元したいという思いがある。店を手伝ってもらっパートも虫亀地区の方を採用している。このような点でも地区への貢献を意識して活動している。

運営をめぐる課題～経営力向上、後継者の問題など

- ✓ 儲けようという発想で始めた事業ではないが、事業者として、どのように経営を安定させるか、より良いサービスを提供するかが課題である。例えば、現状では、団体の顧客への対応、個室等での食事対応などはできていない。
- ✓ 創業時のメンバーが高齢化し、全員が運営に十分関われない状況になっている中で、後継者の確保が課題である。就職などを機に地域外へ人口が流出し、50歳代など後継者となりうる世代がそもそも地域に少ないという問題がある。地域おこし協力隊やインターン事業など外部人材も積極的に受入れを行なっていきたい。